

早稲田大学 教育学部 古典 講評

〔総合分析〕

<p>試験時間</p> <p>国語 90 分 (現代文 2 問 古漢融合 1 問)</p>
<p>出典</p> <p>古文『源氏物語(げんじものがたり)』少女 (をとめ) (一部)</p> <p>漢文『文選 (もんぜん)』卷四十六 「豪士賦序」冒頭 (一部)</p>
<p>解題</p> <p>『源氏物語』平安時代の作り語物語。五十四帖 (巻) からなる。確証はないものの、作者は紫式部と一般的に考えられている。成立の時期も、紫式部以外にも数人の手が加えられていると見られるため、確定しがたく、凡そ 1010 年ごろ、11 世紀の初頭と推定される。</p> <p>『文選』 部集・総集の類。梁の昭明太子蕭統 (しょうとう) らの撰。三十巻。六世紀前半の成立。周から梁に至る約千年間の美文の粹、約八百編を文体別・年代順に並べたもの。中国現存最古の撰集。中国において唐代以降、文人学士の必読の書とされ、科挙の詩・賦が課せられたことに関連して盛行した。日本においても、古くに伝来し、大きく影響を与えた。</p>

〔大問別講評〕

大問番号	設問番号	コメント	難易度
三	問二十	<p>〈傍線部訳〉</p> <p>昨年に引き続き二箇所の傍線部訳を求める出題。傍線部 1 は基本語といえる「かなし」の単語の知識を問う設問。傍線部 5 は「才」と「あぢきなき」の基本語彙の解釈がポイント。</p>	<p>1 : 平易</p> <p>2 : やや易</p>
	問二十一	<p>〈敬意の対象〉</p> <p>敬意の対象を問う典型的な設問ではある。敬語の種類と敬意の対象を判断する敬語法の基礎を備えておくことは基本中の基本。敬語の種類に応じて主体・客体・対者 (聞き手) を、文脈から把握できる読解力が必要な設問。傍線部 A・B は尊敬語で、主体の姫君を敬うことは判断しやすい。よって選択肢はアとウに絞られ傍線部 C の尊敬語「給へ」の敬う主体の判断が鍵となる。敬意の対象を問う設問は、早稲田大学では、04 年スポーツ科学部に出题されている。</p>	標準
	問二十二	<p>〈難訓語〉</p> <p>基本知識。難訓語の読みを問う設問は基本的な出題といえるが、「几帳」の訓は中でも頻度の高いもの。昨年に引き続いて難訓語の読みを問う設問が出题された。</p>	平易

問二十三	<p>〈内容把握〉</p> <p>傍線部が、傍線部の前の心内部の主体が大宮である点と、その内容が「みなさまさま、大臣をも、いとうつくし」である点から判断する。大宮が「うつくし」と思っているのは、(内) 大臣と姫君である。文章を微視的に観察すると力と巨視的に把握する力を養っておきたい。</p>	標準
問二十四	<p>〈空欄補入〉</p> <p>空欄の前の「え」との呼応関係に着目できたかがポイント。終助詞「かな」が接続して、打消しの助動詞「ず」の連体形を補う。</p>	標準
問二十五	<p>〈文法・品詞分解〉</p> <p>極めて基本的な典型的な設問。品詞分解をしてその品詞の組み合わせを問う。強いてポイントを挙げれば、傍線部末の「けれ」を過去の助動詞と誤らない点にあるが、基本事項。</p>	平易
問二十六	<p>〈理由説明〉</p> <p>本文の状況と登場人物の心中を把握しているかを問う設問。傍線部は大宮の御方のねび人たちの発話であるが、このような発話をした原因は直前の(内) 大臣の行動にある。「姫君はあなたにわたし…」 「しひて遠くもなし」が選択の手掛かり。</p>	やや難
問二十七	<p>〈漢文〉</p> <p>(Ⅰ) 〈訓読〉</p> <p>白文をひらがなで書き下し、記述させる設問。再読文字「将」がポイントであるが基本事項。「随」はやや読みにくい。ちなみに「将^レ随之涙」と返り点がつく。</p> <p>(Ⅱ) 〈内容把握〉</p> <p>漢文の内容と古文の内容との対応を問う設問。それぞれの内容を把握しているかを問うものであって、対応箇所の検案に手間と時間を要するが、形式としてはさほど複雑なものではない。</p>	標準 標準

〔総合コメント〕

難易度

標準。昨年の出題の分量や設問に比べると難化したといえる。

分量

増加。昨年の 650 字弱の短い本文に比べると増加したことになるが、本年の『源氏物語』の本文は約 950 字で、教育学部としては平均的な分量といえる。また昨年同様漢文が抱き合わせた形を踏襲したが、昨年は七言絶句が引用され、それに比べると本年の『文選』は少し長いものとなった。設問数は昨年は古文 6 題・漢文 3 題、本年は古文 7 題・漢文 2 題となり、配分に入りがある。

出典

『源氏物語』は最も出題頻度の高い出典。引用の箇所は、さして出題の履歴は多くない。『源氏物語』の概要などを読んでおいて対応できる内容ではないので、こうした著名な出典でも初見の本文を読み解く力を養っておきたい。『文選』は、日本にも多くの影響を与えた作品ではあり、著名なものではあるが、大学入試においてここ数年引用されることは殆どなかった。

形式

一昨年・昨年に引き続き、漢文が古文と併合される形で出題された。古文中の一部分に漢文が含まれる融合文ではなく、形式としては独立した漢文を課し、内容と設問は古文の内容と連動するものであった。古文の設問は傍線部訳・敬意の対象・難訓読語の読み・内容把握・空欄補入・文法・理由説明、漢文の出題は訓読・古文の中に対応箇所を求める設問、いずれも基本的な出題形式といえよう。古文と漢文の内容とを重ね合わせる設問は昨年を踏襲した。